HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	遷延性意識障害患者の生活行動の獲得に向けた看護技術の開発 ： 自立姿勢獲得への端座位援助の効果［全文の要約］
Author(s)	宮田, 久美子
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(看護学)
Dissertation Number	甲第12450号
Issue Date	2016-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63370
Type	doctoral thesis
File Information	Kumiko_Miyata_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文の要約

博士の専攻分野の名称：博士（看護学）　　氏名：宮田　久美子

学位論文題名

遷延性意識障害患者の生活行動の獲得に向けた看護技術の開発

－自立姿勢獲得への端座位援助の効果－

［緒言］

意識障害が長期化した遷延性意識障害の治療法は未だ確立しておらず、患者の増加率は世界で毎年人口 10 万人対 0.5-2 人であると報告されている。また、遷延性意識障害患者の多くは長期の臥床状態にあるため、強度の廃用症候群がみられることが少なくない。そのため、近年では身体の拘縮予防や残存する運動機能の維持、向上に着目したリハビリテーションの必要性が提唱されているが、有効な方法は未開発である。

一方、日本の臨床の看護において、遷延性意識障害患者を他動的に端座位にする援助が実践されており、意思表示や動作が発現したことが複数報告されている。しかし、その看護の内容や身体への効果は明らかになっていない。

そのことから、本研究は、遷延性意識障害患者の生活行動を回復する看護技術として、端座位の援助を構築するための根拠を明らかにすることを目的とした。

［研究Ⅰ］

研究Ⅰは、遷延性意識障害患者への端座位の援助の内容を明らかにすることを目的とした。研究方法は、日常的に端座位の援助を実践する看護師５名を対象として、援助の内容に関するインタビューを行い、その内容を質的に分析した。その結果、端座位の援助の目的は、患者が生活するための身体をつくり、自力で生活することにむけたアセスメントであった。また、廃用的な身体の安全を確保する方法、および自力で座位がとれるための柔軟性やバランスの獲得への方法が確認された。

これらのことから、看護師らは遷延性意識障害患者への端座位の援助が、患者の生活行動の自立と関連していると認識しており、彼らが持つ身体の安全を守る技術を意図的に展開していることが明らかとなった。

［研究Ⅱ］

研究Ⅱは、遷延性意識障害患者への端座位の援助の生理的根拠を提供するため、覚醒と

端座位の姿勢との関係について検証することを目的とした。遷延性意識障害は、覚醒と意識の内容の障害であり、その機構には脳幹が関与していることが知られている。また脳幹には覚醒、および姿勢を制御する機能があることから、遷延性意識障害患者が抗重力姿勢である端座位になることは、脳幹を刺激し、覚醒と姿勢の獲得に有効であると仮定した。研究Ⅱの構成は、覚醒と端座位姿勢の関連を明らかにする研究Ⅱa、および遷延性意識障害患者への端座位の援助の効果を覚醒と姿勢から検証する研究Ⅱｂとした。

研究Ⅱａ は、健康な人において覚醒が低下したときの端座位姿勢を検討した。その結果、覚醒が低下すると、姿勢は特徴的に頭頸部が下垂し、頭頂の動揺が大きくなることが明らかとなった。

研究Ⅱｂは、遷延性意識障害患者２名に端座位の援助を継続し、姿勢を検討した。その結果、約２週間の同援助の継続により、覚醒の改善と頭頚部の挙上、および上肢の動作の出現が確認された。さらに、端座位の援助の過程において、看護師の観察と対応といった生命や安全を守る看護の機能が有効であることが示された。

［総括］

本研究は、臨床において実践されている遷延性意識障害患者への端座位の援助の根拠を提供するため、質的に援助の内容を、さらに定量的にその効果を示した。研究Ⅰおよび研究Ⅱの結果から、遷延性意識障害患者への端座位の援助が、生活行動の回復の看護として有効であることが明らかとなった。また、この援助には看護の独自の機能として、生命を守るための臨床的な判断が必要であり、24 時間モニタリングを行う看護師が遷延性意識障害患者への端座位の援助を提供する意義があることが確認された。